

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.204

November 2020

女性参政権 100 周年

小 檜 山 ル イ

2020年8月26日は、アメリカ合衆国憲法修正第19条が正式に採用されたことを国務長官が宣言してからちょうど100年目だった。およそ70年にわたる戦いの勝利から100年。女性たち、アメリカ社会はどう変わったのか。それがどう総括されるのか。年初には楽しみにしていた。

ところが、コロナである。その中でBLMが起り、日本でも大いに話題になった。京都大学人文科学研究所と慶應義塾アメリカ学会の共催で6月21日に開かれたズームによる「緊急リレー・トーク」に参加したアメリカ学会会員も多いと思う。気がつくと、8月26日になっていた。あわててハワイ発のズームでエレン・C・デュボイスの話聞いた。日本では、アメリカ大使館と市川房枝記念会女性と政治センターの共催で「100周年オンライン記念シンポジウム」が開かれた。都合が合わず、後で録画を見た。アメリカでは、100周年記念の行事の多くが中止やオンラインになったようだ。結果、報道も多くはない。

1970年、50周年のときには、「平等のための女性ストライキ」が呼びかけられ、全米で10万人以上の女性が行進した。この女性動員数は、史上最多で、塗り替えたのは、2017年2月の反トランプ「女の行進」である。一般のアメリカ人の多くは、報道で1970年の行進を見て、初めて第二波フェミニズムの存在を知ったという。1973年には、議会が8月26日を「女性平等の日」と定めた。同年ERAが議会通过。50年前には、投票権だけでは、女性は平等の地平には立てないという強烈なメッセージが発信された。

50年後の8月26日には、ホワイトハウスや議事堂、ナイアガラ滝など全米約300箇所ですべて紫と金のライトアップがあった。金は、光と命の色。紫は、目的に対する忠誠心を表す。NWP (National Woman's Party) の旗には加えて白があり、目的の純粋さを示した。ライトアップでは背景の建物の壁が白であることが多かった。カマラ・ハリスは100周年と1975年の投票権法に言及し、トランプは、女性参政権の批准が決まった8月18日に、

スーザン・B・アンソニが1872年に投票したことを「恩赦する」と発言した(!?)。セントラル・パークでは「女権パイオニア記念碑」が披露された。コロナのなかで街頭に繰り出すモメンタムはなかったが、それなりに100周年は覚えられた。

一方、BLMは、ミネアポリスの衝撃的イベントがあり、街頭でアピールを展開、世界的に広がった。それは、女性参政権100周年を方向づけた。上述のデュボイスが出たズーム・イベントでは、州単位での「投票者身分証明法」の制定が人種や民族、所得による投票権のハードルとなることが問題視された。こうした人種と民族、階級差別への注目は、転じて、100年前の参政権を導いた女性リーダーたちの白人至上主義への批判となった。スーザン・アンソニをはじめとするリーダーたちが、保守層の支持を得るために、時に人種、移民差別のレトリックを使ったことは研究者の間ではつとに知られている。そのことが、100周年を「祝う (celebrate)」ことをためらわせ、「記念する (commemorate)」にとどめようという動きとなった。アイオワ州立大学では、同校卒業生で、女性参政権運動の最終段階での立役者の一人、キャリ・チャップマン・キャットの名を冠する「女性と政治センター」が入る「キャット・ホール」がやり玉に上がった。キャットの白人至上主義の言説ゆえに、建物の名からその名を取り去ることが求められた。この論理に従うなら、できたてのセントラル・パークのアンソニとエリザベス・ケイディ・スタントンの銅像も撤去することになる。そうすると、ソジョーナ・トゥルースだけが残る。

ジェンダーの平等と人種の平等はどちらも追求されなければならない。が、歴史的には、両者が天秤にかけられる時、後者が優先される傾向があった。100周年における自省は、そのことを想起させる。そして、BLMについては、それを批判しながら伴奏する #SayHerName があることを覚えておきたい。

(東京女子大学)

アメリカ学会役員一覧 (2020 ~ 2021 年度)

会長

宇沢 美子 (慶應義塾大)

副会長

佐々木卓也 (立教大)
竹沢 泰子 (京都大)

斎藤眞賞選考委員会委員長兼任

常務理事

佐久間みかよ (学習院女子大)
佐々木一恵 (法政大)
西山 隆行 (成蹊大)
麻生 享志 (早稲田大)
兼子 歩 (明治大)
清水さゆり (ライス大)
本合 陽 (東京女子大)
小田 悠生 (中央大)
橋川 健竜 (東京大)
佐藤真千子 (静岡県立大)
大串 尚代 (慶應義塾大)
前嶋 和弘 (上智大)

会務委員会会務担当
会務委員会会務担当
会務委員会財務担当
年次大会企画担当
年次大会企画担当
年次大会企画担当
年報編集委員会
国際委員会
英文ジャーナル編集委員会
広報・電子化情報委員会
清水博賞選考委員会
中原伸之賞選考委員会

理事

麻生 享志 (早稲田大)
石山 徳子 (明治大)
大串 尚代 (慶應義塾大)
奥田 暁代 (慶應義塾大)
兼子 歩 (明治大)
貴堂 嘉之 (一橋大)
佐々木一恵 (法政大)
杉山 直子 (日本女子大)
土屋 和代 (東京大)
中野耕太郎 (東京大)
新田 啓子 (立教大)
廣部 泉 (明治大)
松原 宏之 (立教大)
山岸 敬和 (南山大)
渡辺 靖 (慶應義塾大)

井口 治夫 (関西学院大)
伊藤 裕子 (亜細亜大)
大津留 (北川) 智恵子 (関西大)
小田 悠生 (中央大)
川口 悠子 (法政大)
佐久間みかよ (学習院女子大)
佐藤真千子 (静岡県立大)
竹沢 泰子 (京都大)
土屋 由香 (京都大)
西崎 文子 (同志社大)
橋川 健竜 (東京大)
本合 陽 (東京女子大)
宮田伊知郎 (埼玉大)
和田 光弘 (名古屋大)

石原 剛 (東京大)
遠藤 泰生 (東京大)
岡山 裕 (慶應義塾大)
越智 博美 (専修大)
川島 浩平 (早稲田大)
佐々木卓也 (立教大)
清水さゆり (ライス大)
舌津 智之 (立教大)
中野 勝郎 (法政大)
西山 隆行 (成蹊大)
肥後本芳男 (同志社大)
前嶋 和弘 (上智大)
矢口 祐人 (東京大)
渡辺 将人 (北海道大)

監事

小檜山ルイ (東京女子大)

増井志津代 (上智大)

森本あんり (国際基督教大)

評議員

青木 深 (東京女子大)
新井 景子 (武蔵大)
飯田 健 (同志社大)
梅川 健 (東京都立大)
大和田俊之 (慶應義塾大)
上 英明 (東京大)
小濱 祥子 (北海道大)
斎木 郁乃 (東京学芸大)
下條 恵子 (上智大)
菅 美弥 (東京学芸大)
塚田 幸光 (関西学院大)
常山菜穂子 (慶應義塾大)
中村 理香 (成城大)
牧野 理英 (日本大)
松川 祐子 (成城大)
箕原 俊洋 (神戸大)
柳生 智子 (慶應義塾大)
余田 真也 (東洋大)
鰐淵 秀一 (明治大)

青野 利彦 (一橋大)
荒木 純子 (学習院大)
石川 敬史 (帝京大)
梅崎 透 (フェリス女学院大)
小原 豊志 (東北大)
櫛田 久代 (福岡大)
小林 剛 (関西大)
坂下 史子 (立命館大)
下斗米秀之 (明治大)
高原 秀介 (京都産業大)
辻 祥子 (松山大)
中嶋 啓雄 (大阪大)
波戸岡景太 (明治大)
待鳥 聡史 (京都大)
松永 京子 (神戸市外大)
三牧 聖子 (高崎経済大)
山口 和彦 (上智大)
若林麻希子 (青山学院大)

阿部 公彦 (東京大)
有光 道生 (慶應義塾大)
板津木綿子 (東京大)
遠藤 寛文 (防衛大)
加藤有佳織 (慶應義塾大)
倉科 一希 (広島市立大)
小森 真樹 (武蔵大)
佐久間由梨 (早稲田大)
菅原 和行 (福岡大)
高光 佳絵 (千葉大)
土田 映子 (北海道大)
中島 醸 (拓殖大)
古井 義昭 (立教大)
松井 孝太 (杏林大)
松本 俊太 (名城大)
森 丈夫 (福岡大)
吉原 真里 (ハワイ大)
渡邊真理子 (西九州大)

石原 剛 編

『空とアメリカ文学』

(彩流社, 2019年, 3,520円)

人類が空を移動することに憧れ、熱気球からはじまり、飛行船、飛行機、ジェット、そして宇宙船へとその手段を獲得していった経緯を編著者石原剛は序章で概観する。空の移動は、人々の心を大いに動かすものであったが、「文学の観点から探った研究は意外に少ない」。そこで自身も操縦桿を握る資格を持つ石原が、アメリカ文学が空の世界をどのように捉えたかをテーマに、空への思いを共有する9人の書き手たちと共に本書を編んだ。

第1章で西山けい子がエドガー・アラン・ポーの「ハンス・プファールの無類の冒険」を中心にポーの展開した存在論的ヴィジョンを追う。第2章では、下河辺美知子が「メルヴィルの海・メルヴィルの空」でメルヴィルが作品上描き出した地図に注目し、その3次元的想像力を指摘する。第3章、第4章はマーク・トウェインを論じる細野香里と有馬容子の論考が並ぶ。両者ともこれまで注目されなかった晩年の作品『トム・ソーヤの外国旅行』をとりあげる。有馬は、トウェインが空への飛翔をユーモラスに描いた事実を指摘し、厭世観漂うと言われた晩年の姿にあらたな光を当てている。

後半の5章では、巽孝之が「宙空都市マンハッタン」で19世紀の地上のフロンティアが20世紀には宙空を舞台に復活する様を鮮やかな切り口で示していく。これ以降の章は飛行機が存在が大きく取り上げられる。藤田義孝は、サン＝テグジュペリを取り上げ飛行文学の変遷をたどる。女性飛行士に注目した石原は、アン・モロウ・リンドバーグを取り上げ、女性を通して飛ぶことの意味を吟味する。山根亮一は、フォークナーの飛行を題材とした『標識塔〈パイロン〉』が批評上封印された事実を検証する。現代作家では、橋本安史が、レイモンド・カーヴァーと飛行機に着目し、地を這う人を描くカーヴァーの捉えた飛行に注目する。現代作家を翻訳する藤井光は、ロード・ナラティブの変遷としての飛行の意味を探求する。

空とアメリカ文学という新しい視点のアプローチに接し大いに啓発された。全てを記すことはできないが、いくつかに最後に紹介したい。下河辺の「21世紀世界を生きる能力の一つとして空間把握能力が不可欠なことは、そのほかの知性に他の人間との心理的距離のとり方などが入っていることを合わせて考えていくべきであろう」という指摘、また有馬のトウェインの論考にある「無限大の空間と耐えがたい孤独がトウェインの作品で結びつくのは自然なのである」という分析。さらに藤井があげて紹介しているリン・マーの『切断』には「中国南部を発生源とする熱病は、21世紀の物流に乗って世界中に拡散し、短期間のうちに全世界の人口を消し去る」という展開があった。本書は、空間で拡散する病に遭遇した私たちにとって、空の世界が崩壊と接続の可能性を持つものであり、巽が指摘する「徹底した絶望の果てのフロンティア」であることを気づかせてくれる。

佐久間みかよ (学習院女子大学)

越智敏夫 著

『政治にとって文化とは何か—国家・民族・市民』

(ミネルヴァ書房, 2018年, 6,600円)

本書は、1999年から2017年に発表された論文から構成されている。しかし、一冊の本に編むに際して、著者は加筆修正を施して通読できる内容に仕立て上げている。通底している著者の関心は、政治の活性化に向けた政治理論の構築である。政治の活性化とは、現実政治に関心をもつ有権者を育成することでも、いわゆる政治活動に関わることでもない。また、政治理論の構築とは、社会認識のための道具としての理論の精緻化ではなく、社会変革のための実践的理論の追求である。政治学者・高島通敏の政治理論を継承しながら(第8章)、著者は、アメリカ合衆国の政治文化をめぐる議論と格闘していく。

著者によれば、政治文化とは、民主主義が成立することを可能にする領域(著者によれば、「市民社会」)で各市民が共通理解・共通価値の発見・形成をめざして日常的に築き上げていく営みのことである。「集団の様々な領域は変化し、出会い、混交し、異化し続ける」とのべる著者にとって、文化本質主義は当然ながら斥けられる。ナショナリズムと重ねて説かれる文化本質主義に対抗しながら、いかにして、異質なものを構成される社会に、その異質性を擁護しつつ、共通理解・共通価値を見出し、その異質性を擁護し、理論としても運動としても困難を極める。

著者は、その困難に自覚的である。したがって、本書は、望ましい政治文化の育成にむけての「仮説」の提示として位置づけられている(第1章)。第2章では、市民社会の構成員である市民の属性・資格が、市民社会から排除される少数者の視線から浮かび上がってくる。第3章では、ナショナリズムに回収されない自律的な市民社会像が模索されている。第4章では、多文化主義の視点から国民国家・ナショナリズムの虚構性が暴かれている。しかし、多文化主義はナイーブに肯定されているのではない。多様な文化が共存しながら共有できる政治文化の構築に向けての「無限のプロセスに耐える必要」が説かれている。ここでは、著者なりの「多からなる一」を作り上げる構想が試論的に提示されている。第5章は、それを引き継ぐようにして、さまざまに論じられている社会の統合理論が批判的な検討の対象になっている。第6章と第7章では、9・11テロ後、非常時という名のもとに国家権力・ナショナリズムに回収されつつある「アメリカ的なもの」を、いかにして、市民社会の側に取り戻して、その内容を鍛え上げていくのが、民主主義の活性化という観点から論じられる。いうまでもなく、非常時はいつか元通り常態へ戻るのではない。非常時は権力の構成をより抑圧的にしていく。しかし、同時に、非常時はその動きに抵抗し、「新たな構想」を生み出すこともでき、そこに、「市民的希望」があると著者はのべる。政治文化の熟成の可能性がそこには開かれているのである。

個人が他者と日常的に交信していくことが、政治文化の熟成には欠かせない。しかし、個人は、時間にも空間にも限定づけられた存在である。それは交信を困難にする。終章は、その限定を個人が越えうる可能性を著者が観た一人芝居の集合的記憶をめぐる語りに見出している。

中野勝郎 (法政大学)

古井義昭 著

Modernizing Solitude:

The Networked Individual in Nineteenth-Century American Literature

(University of Alabama Press, 2019年, \$54.95)

2020年度の清水博賞を受賞した本書は、郵便制度、電信装置、鉄道敷設などによる19世紀の通信革命がもたらした新たなつながりの感覚に対する期待、懸念、懐疑の中で生み出された、「ネットワーク化された孤独」(networked solitude)を、ソローの『ウォールデン』、ハリエット・ジェイコブズの自伝、メルヴィルの「パートルビー」と『ジョン・マー』、ディキンソンの手紙や詩、ヘンリー・ジェームズの「檻の中」を含む1870年代の電信オペレーターを描いた大衆文学ジャンルの中に読み解く試みである。アメリカ文学研究、メディア論、哲学、歴史学といった複数の学問分野の間隙にこぼれ落ちた「孤独」の概念を、文学テキストの精緻な読解と歴史的資料の丁寧な分析により拾い上げ、これまでもっぱら個人主義の文脈で考察されてきた19世紀アメリカ文学における「一人であること」(aleness)の意味を、自己充足しながらも想像の共同体を通じて外界とのつながりをもつ「孤独」(solitude)という新たな視点でとらえ直すことに成功している。

本書が最も優れているのは、広範囲にわたる文献調査と慎重かつ鋭敏な読解である。例えば、主人公パートルビーの孤独を19世紀の通信革命への抵抗と読む3章において、著者はアメリカの郵便事業の歴史、なかでも1825年に設立された配達不能郵便局について綿密に調べ上げ、その歴史的な文脈の中で、長い批評史をもつ「パートルビー」の新しい解釈を導き出している。また1章においては、ソローの孤独と宗教性の結びつきについて、ヒンドゥー教徒の聖典『バガヴァッドギーター』まで参照して論証し、4章においては、アーカイヴに分け入り、封筒に書きつけられたディキンソンの詩から、通信革命の標榜するスピード信奉への抵抗を読み取る、著者の実直な研究姿勢と資料解析の見事な手腕が示されている。

序論でチャールズ・ブロックデン・ブラウンを例にとりて論じられる、社会からの孤立という否定的な含意の18世紀の孤独から、本論で論じられる両義的かつ肯定的な意味での19世紀の孤独、そしてエピソードで映画『her/世界でひとつの彼女』(2013)に触れつつ論じられる、インターネットによる過剰なつながりの只中の21世紀の孤独まで、本書はコミュニケーションをめぐる一つの歴史物語として読むことができる。コロナ禍で再度読み直すと、著者が5章において、電信技師の物語 (telegraphic literature) という大衆文学のジャンルを再評価し、そこに描かれるテクノロジーによる想像上のつながりが喚起する現実世界の物理的なつながりへの渴望が、ヴァーチャルとリアルな二重生活を営む21世紀を予期させると論じているのが、さらに重く予言めいて響いてくる。

著者が本書の出版にこぎ着けるまでの裏話は、*Sky-Hawk* 第7号 (2019) 掲載の「対談「国際的研究の未来」」を参照。いかにしてこれほど熟達した英文をものするに至ったのかも含め、ユニークな努力の過程を知ることができる。

斎木郁乃 (東京学芸大学)

海外移住150周年研究プロジェクト 編

『遙かなる「ワカマツ・コロニー」

—トランスパシフィックな移動と記録の形成—

(彩流社, 2019年, 4,950円)

「ワカマツ・コロニー」とは、アメリカ合衆国(以下、アメリカと表記)のカリフォルニア州エルドラド郡ゴールドヒル地域に設けられた農場と、日本からそこへの移住者を指す言葉である。1869年に彼らが横浜港から太平洋を渡ってから、ちょうど150年という節目の年に出版された本書は、これまでほぼ実証的研究のなかった「ワカマツ・コロニー」に関する初めての本格的な研究の成果である。

本書は5章で構成されている。第一章(菅[七戸]美弥)は、アメリカのセンサスなど日米両方の史・資料を使って、これまであまり検証されることのなかった幕末・明治初期の国外と国内双方の移動・移住実態を、環太平洋世界の移動の文脈から分析している。第二章(小澤智子)では、「ワカマツ・コロニー」を含む初期の海外への移動や日本についての新聞記事・広告・風刺画など、日英両言語の報道を検証し、特に情報が日本から海外への人びとの移動に与えた影響について考察している。第三章(北脇実千代)は、「ワカマツ・コロニー」から日本へ帰国してきた人びとに焦点を当てて、彼らの軌跡を辿る。第四章(飯野朋美)では、木村毅の著作『明治建設』を中心に、「ワカマツ・コロニー」の語りにおけるシンボル、「おけい」をめぐる言説が日本で広まった経緯を検証している。第五章(長谷川寿美)では、「ワカマツ・コロニー」に関する言説を新たな資料も使って丁寧に分析し、伝承・創作と史実を仕分けする作業をしている。

衆井輝子と飯野正子を含む著者たちの共通の視点としては、日本人海外移住の歴史をグローバル・ヒストリーの文脈に位置付けることである。また、これまで未分析の史・資料による「歴史の発掘」が随所に見られる。例えば、第一章では、アメリカのセンサス史を専門とする著者が、移動する人びとだけではなく、送り出し側の居住地の外国人によるネットワークまで、豊富な史・資料から詳細に検証し、従来断片的にしか知られてこなかったそれら外国人がグローバルにつながっていたことが示されている。第二章でも、新聞記事など膨大な資料を使い、当時日本にいた外国人たちとそのネットワークが、「ワカマツ・コロニー」など初期の日本人の海外渡航に関与していたことを示唆している。また、第三章では、従来の研究で等閑視されてきた帰国者、西川友喜、大藤松五郎、柳澤佐吉の3名に焦点を当てることで、「ワカマツ・コロニー」を人の移住の連続性の中に置くことを試みている。最後に本書の巻末には、雑誌などに描かれた挿絵、写真、この時期の渡航者や米国への入国者名簿、当時の外国人の動向をまとめた表など、著者たちが収集し、発掘・整理した、150ページにも渡る史・資料が収められており、こちらも圧巻である。

以上、本書には、豊富な史・資料と綿密な調査から未開拓の分野を考察した優れた論考が収められている。これまで多くの「伝承」によって飾られてきた「ワカマツ・コロニー」を、見事に研究主体として成立させており、学術的貢献は多大である。

柳澤幾美 (名古屋外国語大学 非)

青野利彦・倉科一希・宮田伊知郎 編
『現代アメリカ政治外交史——「アメリカの世紀」
から「アメリカ第一主義」まで』
(ミネルヴァ書房, 2020年, 3,520円)

2017年1月以降のアメリカの政治外交の軌跡は大統領の個性や資質、識見がいかに大きな影響を与えるものであるかを改めて示している。三権のなかでやはり行政権の長の存在は格別で独特である。本書はタイムリーなことに、第二次世界大戦後の歴代大統領を「結節点」にアメリカの政治外交史の展開を探究する試みである。編著者を含む11名の執筆者はアメリカ研究を専門とするが、その専攻分野は政治学、社会史、外交史、ジェンダー史など多岐にわたる。

まず編著者の一人である青野が冒頭、本書では大統領に焦点をあて、移民、人種、ジェンダー、セクシュアリティなどの社会争点にも顧慮しながら政治外交史を検討すると説明する。青野はさらに序章「建国から第二次世界大戦までのアメリカ」にて、この視点にたち建国期から第二次大戦末期までの歴史をまとめ、本書の導入部分とする。以下豊田真穂が「新しい時代の幕開け」(トルーマン)、倉科一希が「『アメリカの世紀』の大統領」(アイゼンハワー)、青野が「ニュー・フロンティアへの挑戦」(ケネディ)、水本義彦が「戦後アメリカ自由民主主義の変容」(ジョンソン)、佐原彩子が「非民主的政治外交の展開とその限界」(ニクソンとフォード。この章のみ二人の大統領を扱う)、上英明が「未完の物語」(カーター)、兼子歩が「新保守主義の内政と外交」(レーガン)、吉留公太が「冷戦終結と分裂するアメリカ社会」(父ブッシュ)、西山隆行が「中道路線と冷戦後秩序の模索」(クリントン)、宮田伊知郎が「『思いやりのある保守主義』と『対テロ戦争』」(子ブッシュ)、森聡が「政治の分極化と対外関与負担の抑制」(オバマ)と題する各章でそれぞれの大統領の内政・外交を考察し、編著者の倉科と宮田が終章「『例外』の国の例外？」でトランプの政策を検討し、全体の議論をとりまとめる。

各章のタイトルは執筆者の問題関心・意識を端的に伝えており、興味深い。さらに実際の議論では執筆者の専門的知見が十分に活かされており、読者はそれぞれの独自性を堪能するであろう。日米関係にやや手薄な印象はあるが、コラムが対日関係の重要なトピックを解説している。本書が視野を社会問題に広げたことは慧眼で、時代が下るとともに政治外交と人種、ジェンダー、移民問題等との関係が重要になることがよくわかる。トランプの当選は確かに衝撃的であったが、経済格差の拡大、対外介入と自由貿易への不満、人種・社会問題をめぐる緊張は過去四半世紀の間に強まってきたのであり、彼の登場はすでに社会のなかに「胚胎」していたのである。

本学会会員がこの新刊紹介を目にする頃には、次期大統領は(おそらく)確定しているであろう。今回の選挙結果がアメリカはもちろん国際社会に与える影響は四年前のそれよりも甚大である。現代史が明らかに岐路に立つ時、大統領を軸に戦後アメリカの政治外交史を概観する本書の刊行にはことのほか大きな意義がある。

佐々木卓也(立教大学)

塚田幸光 著
『クロスメディア・ヘミングウェイ
——アメリカ文化の政治学』
(小島遊書房, 2020年, 3,300円)

本書は、フォークナーを中心としたアメリカ文学研究、そして映画研究の双方で精力的に仕事をこなす塚田幸光氏の新刊である。氏は、長きにわたって日本ヘミングウェイ協会の主要構成員としても活躍しており、本書の萌芽を2006年の同協会シンポジウムでの自身の発表に定める(「おわりに」)。本書は、氏の15年弱にわたるヘミングウェイ研究の集大成ということになろう。

ヘミングウェイの「テキストから見えてくるメディアの性/政治学を考察する」(10)ことを目論む本書の要諦は、次の一節に示されよう。「第一次世界大戦、ギリシア・トルコ戦争、スペイン内戦、そして第二次世界大戦。ヘミングウェイの生きた軌跡が帝国のそれと呼応し、時代と国家の欲望は、テキストとコンテキストを横断し、隠蔽/開示[イン/アウト]する」(11)。ここには従来のヘミングウェイ研究の枠組みを刷新しうるいくつかの特徴を見て取れる。一つには、いわゆるヘミングウェイ・キャンオンを軸に組み立てられてはおらず、「スミルナ棧橋にて」や詩編といった比較的マイナーな作品群を論じる章が目立つ(それぞれ第1章と2章)。また、ハリウッドの映画作成倫理規定とフィルム・ノワールの関係を解き明かしながら、その文脈でヘミングウェイの短編を基にロバート・シオドマク監督が手掛けた映画化作品『殺人者』(1946年)のジェンダー関係を論じる第6章などには、文学/映画研究者が読み解く映画作品論として、氏ならではのアプローチが光る。本書は、作家ヘミングウェイそして彼の文学という「テキスト」と、その後景「コンテクスト」の関係を、反転あるいは問い直ししながら、立体的なヘミングウェイ像を提示する。

先の引用にあらわれる「隠蔽/開示」のような語句のスラッシュによる併置は、同書を貫く批評意識を端的に例示する。おそらくは、映画研究を通じて氏が先鋭化させた方法論なのだろう。というのも、本書に頻出する「/」に結ばれた語句の組み合わせは、第4章で紹介される映像作品における「クロスカッティング(平行編集)」を想起させるからだ。異なる複数のシークエンスを交互に示すことで、ある統合的イメージを生起させる編集技法である(132-33)。これをふまえれば、塚田氏がふったルビ「イン/アウト」に明らかのように、対義語であるはずの隠蔽と開示の組み合わせも、スラッシュで結ばれることで、その間の連続性あるいは共犯関係が示唆される。文学と映画の問い直し(「クロスメディア」)という本書の大枠は、このようにして細部の議論の展開によって反復されながら、連結部であると同時に間隙—すなわちスラッシュ—が生み出すモニター・ジョ効果の一貫したロジックによって、駆動されていく。

なお、第3章「欲望のスクリーン—ターザン、帝国、ジャングル・プール」を筆頭に、本書が優れた1930年代アメリカ文化論である点も申し添えたい。

辻 秀雄(東京都立大学)

アメリカ学会海外渡航奨励金
—国外の学会やシンポジウムで発表する方を対象とする助成制度のご案内—

このたびアメリカ学会では、国外での学会やシンポジウムにて発表する方を対象に、以下の要領で渡航奨励金を支給することになりました。本制度による給付を希望する方は積極的にご応募ください。

1. 応募資格：

- ① アメリカ学会の会員であること。
* 応募時にアメリカ学会への入会手続中である場合はその旨明示すること。
- ② 国際学会やシンポジウムでの発表時に、日本に在住し、日本からの旅費を要すること。
- ③ 発表内容がアメリカ研究に関するものであること。
- ④ 大学院生等の若手研究者を優先的に検討し、そのほか、助成の必要性、発表の内容を総合的に判断する。

2. 審査基準：

- ① 大学院生等の若手研究者を優先する。大学院生については発表をしない場合も応募可能。
- ② American Studies Association, American Studies Association of Korea, Organization of American Historians のいずれかの年次大会で発表する方を優先するが、これら以外の国際学会やシンポジウムで発表する場合も応募できる。(2021年度 OAH はオンライン開催となりました。)
- ③ 他組織からの援助のないものを原則として優先する。
- ④ そのほか、助成の必要性、発表の内容を総合的に判断する。

3. 応募方法、結果発表、発表後の提出書類

- ① 次の書類を12月16日から31日までの期間に、国際委員会 (international@jaas.gr.jp) 宛に送ること。応募メールの件名を「JAAS 海外渡航奨励金応募」と明記すること。
 - (1) 履歴書
 - (2) 業績書
 - (3) 発表が受け入れられたことを証明する文書 (電子メール可)
 - (4) 発表のタイトルと要旨 (英語で250-300語程度とする)
 - (5) (ASA, ASAK, OAH 以外での発表の場合のみ) 当該国際学会やシンポジウムに関する情報 (目的、歴史、規模等、字数は指定しないが、簡潔で正確であること)
 - (6) 理由書 (奨励金を必要とする理由。他組織からの援助のないものを原則として優先するので、申請時にほかの組織による援助を申請中か、あるいは援助を受けることが決定した者は、その旨明記すること。ほかの組織による援助のなかには、所属機関の研究費を充当する予定も含む。なお、旅費・宿泊費 (実費) の不足部分に限り、他の補助金との併用が認められる。)
- ② 審査結果は、1月中に応募者に通知し、学会 HP で公表する。
- ③ 発表終了後、2週間以内に報告書 (邦語 1,200 字程度あるいは英語 500 語程度とする) および領収書の原本 (旅費・宿泊費) を提出すること。

4. 支給額

アジア圏の場合は一人5万円、アジア圏外の場合は一人15万円を原則とする。

国際委員会 (international@jaas.gr.jp)

~~~~~  
**会員のみなさまにお願い**

ご住所・所属等の変更が生じた場合には、速やかに事務局 (office@jaas.gr.jp) までお知らせください。また、メールアドレスを登録されていない方は、極力ご登録くださいますようお願いいたします。

事務局

## OAH 年次大会への参加費用補助中止について

2021年4月15日から18日まで、シカゴ（Sheraton Grand Chicago）において開催予定でした Organization of American Historians の年次大会は、新型コロナウイルスに対する安全確保のため、オンライン開催となることが決定されました。例年はアメリカ留学中の大学院生会員の皆様にこの学会の旅費および宿泊費が補助される制度を設けていますが、大会のオンライン化を受け、補助を中止することとしました。御了承下さい。

国際委員会（international@jaas.gr.jp）

---

### 『アメリカ研究』第56号「自由投稿論文」募集のお知らせ

学会機関誌『アメリカ研究』（年報）は2022年3月に第56号を刊行する予定です。会員諸氏の積極的な投稿をお待ちしています。

1. 内 容 アメリカ研究に関する未発表論文。前年度『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文が掲載された方は、本年度の投稿をご遠慮ください。また、同じ年度に、あるいは年度をまたいで『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することはできません。これはなるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。
2. 枚 数 論文は33字×34行のレイアウトで19ページ以内（註を含む）。  
執筆要項は学会ウェブサイト参照のこと。[http://www.jaas.gr.jp/journal\\_guide.html](http://www.jaas.gr.jp/journal_guide.html)
3. 原稿締め切り 2021年8月31日（火）
4. 提 出 電子メールで年報編集委員会宛て（nenpo@jaas.gr.jp）にお送りください。

\* 投稿希望者は、論文題目を2021年6月末日までに電子メールで、年報編集委員会宛て（nenpo@jaas.gr.jp）にお申し込みください。

---

### 『アメリカ研究』第56号「特集論文」募集のお知らせ

『アメリカ研究』第56号の特集テーマは、「疾病／公衆衛生（仮）」です。趣旨文は次号（4月号）に掲載予定です。「特集論文」に応募希望の会員は、2021年6月末日までに、氏名・所属・論文題目および構想・資料などの説明（400字程度）を電子メールで、年報編集委員会宛て（nenpo@jaas.gr.jp）にお申し込み下さい。その際のタイトルは「『アメリカ研究』特集応募」と明記してください。

執筆要項は学会ウェブサイト参照のこと。[http://www.jaas.gr.jp/journal\\_guide.html](http://www.jaas.gr.jp/journal_guide.html)

原稿締め切りは2021年8月31日（火）

『英文ジャーナル』第33号原稿募集のお知らせ  
*The Japanese Journal of American Studies*—Call for Papers

JAAS members are invited to submit proposals for papers to be included in the 33rd issue (June 2022) of *The Japanese Journal of American Studies*. For the coming issue, we would welcome submissions related to “mobility/immobility,” the issue’s special topic. Any kind of mobility or lack of it—geographical, social, economic, or other kinds—falls within the scope of the special topic. We would also accept submission of proposals that deal with any other topic that sheds light on aspects of American ways of life, society, history, literature, politics, economy, law, art and architecture, etc.

Proposals, consisting of a title and abstract (approximately 300 words), should be sent to the JJAS Editorial Committee by January 4, 2021 via email at [engjournal@jaas.gr.jp] as attached electronic files. Completed manuscripts will be due May 10, 2021 (maximum 8000 words, including notes) and should also be sent to the above email address. Papers must be written in English, based on original research, and previously unpublished. Authors may submit only one proposal per issue.

Kenryu Hashikawa, Editor, JJAS

---

## 新入会員

巖 公博  
榎本悠希  
松原留美

カナダ大使館  
慶應義塾大学 (院)  
九州産業大学 (講)

日 経 化  
文 化 思  
文 環 言

(\* 入会申し込み順。専門領域の略記については、PDF版会員名簿作成用アンケートおよび学会ホームページに記載の新表記法による)

---

## 編集後記

絶景には容易には辿り着けない。地球の胎動を感じる赤茶けた大地・キャニオンランズ、スカイツリーよりも深い渓谷ブラック・キャニオン、草花と氷河のパラダイス・マウントレニエ、そして天空のグレイシャー。ヨセミテですら、観光客がひしめくヴァレーの奥に珠玉の光景がある。数時間、いや半日以上歩かないと宝石は見つからない。62の国立公園、そして保護区や史跡はさらに数百ある。それらを訪問し、踏破するのがライフワークだが、今年は訪米すらままならない。コロナ禍、いつになったら終息するのやら。そこで思うのは、アメリカ研究の意味である。文献リサーチより、アメリカ・パノラマを体感すること。最近はそのちらの方が大事に思える。

(塚田幸光)

2020年11月30日 発行

アメリカ学会

〒550-0001 大阪市西区土佐堀1丁目4-8

日栄ビル703A

あゆみコーポレーション内

Tel: 06-6441-5260 Fax: 06-6441-2055

<http://www.jaas.gr.jp>

発行人 宇 沢 美 子

編集人 本 合 陽

印刷所 (株)国際文献社

〒162-0801 新宿区山吹町 358-5